

二つの独占理論

——白杉庄一郎氏とルダコワ女史——

小 檜 山 政 克

以下私は、価値法則と独占価格・独占利潤の関係を理論的に考えてみるための手がかりとして、故白杉庄一郎氏とルダコワ女史の独占価格・独占利潤についての研究を検討してみたいと思う。これは近く発表する予定の価値法則と独占価格に関する書物の中の一部として執筆したものであるが、それを本誌の論文に許された枚数にまで省略調整をおこなった上でここに掲載させていただくことにしたものである。

第一章 白杉庄一郎氏の価値法則と独占価格・独占利潤の関係に対する見解について

故白杉庄一郎氏が、価値法則と独占価格・独占利潤の関係について、いろいろと苦心して研究されたあとは、氏の著作『価値の理論』(一九五五年)、『独占理論の研究』(一九六一年)、『独占理論と地代法則』(一九六三年)によって知ることができる。とくに独占利潤に関する氏の所説は、いわゆる「白杉理論」として、一九六一年の氏の死後も、わが国の経済学界で論争のまとなってきた。わたくしは、一九六〇年代のはじめの論争については当時知るところがすくなく、今回本稿の執筆にあたって氏の著書と氏に対する当時の若干の批評を研究すること

ができた。そして冒頭のテーマを追究するためには、白杉氏の理論を批判的に分析して、その中にちりばめられている経済学的思考を掘りだして、もっと科学的に発展させ、練りあげていくことが有益だと考えるにいたったので、以下そのような作業を試みることにする。

白杉庄一郎氏の価値法則と独占利潤の問題に関する理論のエッセンスは、その大枠をシェーマ化して述べれば次のようになると思う。

1 社会の総欲望が、商品の価値をきめる社会的必要労働時間に対して、限定者としての役割をはたしている。

2 そのために限界的な個別的必要労働時間によって商品の市場価格がきまる。

3 その結果比較的すぐれた生産条件をもっている企業に生まれる「特別剰余価値」 \parallel 「虚偽の社会的価値」
(農業ではなくて工業における)の実体的基礎は、社会的評価(社会的欲望をもとにした)と「強められた労働」
(複雑労働)である。

4 資本主義の自由競争段階では、右のような限界原理の支配は、農業でのみ長期的で工業では短期的であるが、独占段階では工業でもこの支配が長期的になる。そして「特別剰余価値」 \parallel 「虚偽の社会的価値」が長期的固定的となったもの、すなわち独占的剰余価値が、独占利潤の基本的源泉であり、このような独占利潤をふくむ独占価格とは、市場価値ないし市場生産価格からの背離を固定化した市場価格である。

右のように白杉氏の独占利潤論は、一番基礎の価値論から首尾一貫した(もちろん厳密に言えば問題はあるが、その大すじにおいて首尾一貫した)論理的順序で構成されている体系であるが、わたくしはここでその体系を全体として批判の対象とするつもりはない。わたくしの意図は、白杉氏のこのような理論の中にふくまれているいろいろ

貴重な問題点(積極面もわるい面も)をとりだして分析していくなかで、わたくしじしんの独占利潤論、独占価格論を展開していくことである。

白杉氏がその諸著作の中で述べているいろいろな考えの中で、わたくしにとって興味のある、重要だと思われる問題点を列挙すると、つぎのようになる。

- (1) 社会的必要労働時間の規定に社会的欲望はどう関連するか。
- (2) 市場価値論における限界原理の問題。
- (3) 市場価値論における需給均衡の問題。
- (4) 特別剰余価値の源泉。「虚偽の社会的価値」の実体的基礎はなにか。その場合「強められた労働」ないし複雑労働という考え方や、社会的評価(欲望)の問題を入れてよいか。
- (5) 特別剰余価値の固定化として独占利潤を説明する説。
- (6) 独占価格は市場価格の特殊な形態だとする白杉説は正しいか。その場合価値との関係はどうなるのか。
- (7) 流通主義的な独占利潤説を批判して生産過程からの独占利潤説を主張する白杉氏の観点の中から掘りおこすべき問題点。
- (8) 独占資本主義が一面で生産力を発展させる進歩性をもっているという白杉氏の観点の中から掘りおこすべき問題点。
- (9) 生産過剰を予防するために独占が生まれたとする着眼点。
- (10) 優秀巨大な生産設備など特別剰余価値生産の具体的な条件、方法。

- (11) 独占利潤を不等価交換から求める説に対する白杉氏の批判（これは(7)と関連）。
- (12) 指導価格（ブライス・リーダー的独占価格）と市場価値・価格の関連と白杉説との関係。
- (13) 短期的限界原理と長期的平均原理という白杉氏の着眼点について。
- (14) 独占段階では、独占体間と非独占体間の二つの平均利潤が存在するという立場にくみする白杉氏の考えに
さう。

一 白杉氏の市場価値（価格）論のあやまりについて

右の問題点のうち、最初の三点（社会的必要労働時間の規定と社会的欲望の関連、市場価値論における限界原理の問題と需要供給関係の問題）はとくに密接に関連している。白杉氏は『価値の理論』第一章第三節の三「社会的必要労働時間の測定」という項で「……以上、社会的必要労働時間の測定される原理を略説してきたのであるが、そのさい特に注意しておかなければならないのは、社会の総欲望が社会的必要労働時間の限定者としての機能を果たしている、ということである。」（同書二二八—二九ページ、傍点は引用者）と特に強調している。白杉氏がここでこ
ういう意味は、次のような限界原理を主張するためには総欲望を前提としなければならないからである。すなわち「……社会的生産が私的生産の複合という形をとっているような社会においては（——つまり商品生産社会のこ
と——引用者）、……社会の総労働時間が総生産物に対して平均されるかわりに、むしろ、すべての生産物が限界
必要労働時間にむかって平準化される。各生産者の個別的な平均必要労働時間が社会的に平均化されるのではな
くて、すべての個別的必要労働時間があたえられた範囲内で最高の——したがって限界的な——必要労働時間に

むかつて平準化されるのである」（同書一三六ページ）と。まわりくどくてわかりにくい文章であるが、要するに白杉氏は、一番生産性の低い水準の生産者のグループつまり限界的な生産者の個別的な必要労働時間によって市場価格がきまるのだということを、主張しているのである。そして注意しておかなければならないのは、白杉氏の考えでは、右のような状態が成立するのは、「生産過剰というような状態の存在しないかぎり」（同書一三九ページ）という意味での需給の適合がある場合だというのである（マルクスでは需給不均衡の場合に限界原理できまる場合がある）。つまりそれだけの需要のあるかぎり、一番高かかった生産者グループの製品も売れるわけだから、かれらの個別的な価値で市場価格がきまるのだというのが白杉氏の主張だが、これは、すでに当時井上晴丸氏が批判したように、明らかに白杉氏の独断的な誤りである。

* 井上晴丸「いわゆる『平均化原理』と『限界原理』——白杉理論への疑問」（『立命館経済学』、第十一巻第五・六号、八五ページ）。

いったい、単純商品生産の場合には別として資本主義的商品生産の場合には、最低限として費用価格分（つまり $c + v$ の分、これは限界企業では一番高い）さえあれば投下資本は補填されるのだから、生産は続けられるのである。いいかえると、限界企業では費用価格が大きくなって、それが平均利潤にくいこみ、結局利潤がなくなるほどになっても、販売価格が費用価格以下に下がらなければよいのであって、この意味で費用価格が限界点なのである（もちろん厳密に言えば、それでは資本家の生活は維持されず、また拡大再生産は不可能ではあるが、いまその点はしばらくおく）。この点を理解しないで、限界企業の個別的価値に市場価格がならないと、限界企業は生産が続けられないから、限界企業の個別的価値で市場価格がきまるのだという白杉氏の主張は、明白な誤りである。

しかし、白杉氏がここで扱っている中で興味があるのは、社会的欲望・需要の問題であり、市場価値をきめる場合の平均原理と限界原理の問題である。

二 『資本論』における価値分析の三つの段階

白杉氏の理論はマルクスの理論の換骨奪胎ないし歪曲のようなものであるから、ここでマルクスの『資本論』全三巻における価値(社会的必要労働時間)の分析のプロセスについて、わたくしなりの検討を加えてみよう。『資本論』全三巻における価値ないし社会的必要労働時間の分析は、抽象から具体へというマルクスの叙述の順序にしたがって、三つの次元ないし三つの段階に行なわれていると考えてよいと思う。この三段階とは、

- 1 第一巻の個別商品価値の次元
- 2 第三巻第一〇章における市場価値(個別商品ではなくて、部門全体の商品の需要供給関係も関係する)の次元
- 3 第三巻第三七・三八章における価値、つまり社会的欲望の問題と限界原理をふくんだ次元における価値のことである。白杉氏は右の3を2に代入するのであるが……。これまで多くのマルクス経済学者がマルクスの価値論を論ずる場合に、たいてい右の1の段階しか扱わず、2の次元の研究は不十分であり、3の次元の問題は、しばしば言及されるにもかかわらず、かれらの理論体系の中にその問題がまじめにとりいれられることは、あまりなかったようである。その中で白杉氏が2、3の次元の問題を積極的にとりあげたことは注目してよいと思う。しかし白杉氏は、いわゆる近代経済学の限界原理、さらにいえば限界効用学説の批判的摂取ということを意図していたようであるが、『資本論』の理論体系からみるならば、白杉氏は右の3、つまり第三巻の地代論(差額地

代論)でマルクスがのべている価値と社会的欲望の關係および差額地代における限界原理を、まちがったしかたで、2の市場価値論に混入してしまったのである。

白杉氏をまちがったといったが、それはどういう意味でいったのかというと、それは市場価値をきめるのは、生産者の中の上・中・下位グループのどの個別的価値が市場価値をきめるのかという問題に關してのことである。実は、この問題については、わが国の学界でも必ずしも、だれもが認めるような明白な認識が確立されているとは思えないのであるが、わたくしは、市場価値をきめるのは、中位グループが大量を占めていて、その個別的価値が平均に近い場合、あるいは、上位・下位グループのいずれかがその部門の大量を占めていて加重平均によってその市場価値をきめている場合であつて、需給不均衡のために上・下両端のグループの個別的価値によってきまる場合は、それは本来の市場価値ではないと、考える。両端のグループの個別的価値によって市場価値がきまるのは、需要が極端に大きいか供給が極端に小さい場合か、その逆の需要が極端に小さいか供給が極端に大きい場合であつて、それは一時的あるいは特殊なものである。これが白杉氏の市場価値論のまちがいに關連してわたくしがのべたい積極的な主張である。

前に列挙した問題点の中で、価値に關して、社会的欲望と限界原理と需給關係を最初にあげ、また『資本論』の価値分析の三段階を指摘したのであるが、これは結局右にのべたように、中位水準グループなどの大量商品によつてきまるのが本来の市場価値であつて、両端グループの水準によつてきまるのは特殊の市場価値(マルクスにならつてこれも価値と呼んでおく。マルクスはまたこれを市場価格と呼ぶこともある。いったいにマルクスのいう価値という用語はもつとつきつめていかないと、あいまいさが残る)であるということ、そしてこの特殊の市場価値(あるいは

市場価格)は、右のマルクスの価値分析の第二段階で不十分ながら指摘されており、そして第三段階では差額地代の問題としてくわしく展開されているのであるが、そこでは需要供給の相互関係との関連で、限界原理が認められているわけである。ところが白杉氏は、このようないわば特殊の市場価値を本来の市場価値としてしまおうという、基本的な誤まりをしているのだ。

三 白杉氏の特別剰余価値論のあやまりについて

この標題にあげた問題についてであるが、第一に、白杉氏は、特別剰余価値と「虚偽の社会的価値」を同一視してしまい、あげくのはては特別剰余価値の実体的基礎はなにかというような迷論を出してくる。すなわち氏は書いている。「……土地生産物の場合とはいくらか事情が異なるとはいえ、工業生産物の場合にも市場価値の法則からしてすでに、特別剰余価値の形で、地代に類似した一種の「虚偽の社会的価値」が発生してくる。……限界以上の生産諸条件をもつすべての生産者に、特別剰余価値の形で、一種の「虚偽の社会的価値」が帰属する。そのかぎり、一種の「虚偽の社会的価値」の存在という点にかんし、農業と工業とを区別すべきところはなにかのごとくに考えられる」(『独占理論の研究』、一七ページ)。ただしこの文章のすぐあと、氏は「虚偽の社会的価値」の存在様式については、農業と工業とは区別すべきで、工業ではそれが個別的経過的なものであって、長期化することはできない、といている。

特別剰余価値の実体的基礎なるものについて白杉氏は次のようにいう。「……「虚偽の社会的価値」の性格をもつからといって、特別剰余価値は決して実体のないものではなく、一部分は独特の社会的評価にもとづくもの

として、また一部分は「強められた労働」の生産物として実体的基礎をもつ、と考える。」(『独占理論の研究』、一五一ページ)。「……価値法則はこのような社会的評価を前提とするものであり、この社会的評価の基礎には社会的欲望がよこたわっている。価値は単に技術的な生産条件によって決定されるものではなくて、同時に社会的欲望によって決定される側面をもつのである。……価値法則は基本的には社会が欲望し必要とする商品を生産するための費用の算定にかかわるものであり、その費用の算定は右のごとき社会的評価を通じておこなわれる……。資本主義社会においては、この社会的評価はより小さな個別的費用をより大きな社会的費用に平均することによって、優秀な生産者に特別剰余価値を与える。」(同書一五五ページ)。「……例外的な生産力をもち「強められた労働」として作用することによって、平均労働とは質の異なった一種の複雑労働が生まれ、より大きな価値を創造するところに、特別剰余価値の第二の実体的基礎が見出されるのではないであろうか。」(同書一六一—一六二ページ)。

そもそも特別剰余価値というのは、あくまで平均原理によって、つまり中位水準の大量の商品の個別的価値に近く社会的価値がきまってくるからこそ生まれるのであって、その実体的基礎はなにかというようなことをいいたすなら、それはまぎれもなく、このような真正正銘の平均原理による社会的価値であるから、そこには農業におけるような「虚偽の社会的価値」などは生まれようがないのである。これに反して、農業では限界生産者の個別的価値を基準にして差額地代が生ずるから、限界原理と平均原理のくいちがいがいから、「虚偽の社会的価値」が生まれるのであることは、いうまでもない。したがって、農業における「虚偽の社会的価値」からの類推から、特別剰余価値の実体的基礎なるものについて主張する白杉氏の議論は、そもそも問題提起のところからまちがっ

ていると、いわざるをえない。

白杉氏のいう「強められた労働」ないし「複雑労働」が特別剰余価値を生み出すという議論についていえば、たしかにマルクスは、特別剰余価値を手に入れる資本家のところの「例外的な生産力をもつ労働は、何乗かの労働としての効果をもっている。すなわち、同一時間内に同種の労働の社会的平均労働よりも、より多くの価値をつくり出す」といっている。しかしここでマルクスが言っていることは、文字どおり、特別剰余価値を手に入れる資本家のところの労働は、客観的に、平均的な労働よりも同一時間に多くの価値をつくり出すのだ、といっているだけである。「何乗かの労働」というのを「強められた労働」と訳しても、右のような意味に理解するのならそれでよいが、なにかこれをひねくりまわして、特別な解釈をつけていこうというのは、むだなことである。まして、この「強められた労働」を「複雑労働」だなどというのは、論外で、価値論についての初歩的な誤りである。そもそも複雑労働とか単純労働とかいうのは、異種労働つまり違った使用価値をつくる労働を同一単位に還元する場合のことである。そして価値（社会的必要労働時間もこれに関連したもの）をつくる抽象的人間労働は本来単純労働を基礎としたカテゴリである。そして特別剰余価値のところの問題になっているのは、右のマルクスからの引用文にもあるとおり、同種の労働つまり同じ種類の使用価値をつくる労働の間での、社会的必要労働時間と個別的労働時間の差違のことなのであるから、そこへ単純労働とか複雑労働などという話をもってくるのは、カテゴリの混乱もはなはだしい、といわざるをえない。

* K. Marx. *Das Kapital*, B. I. S. 333. (Dietz Verlag Berlin, 1955)

四 白杉氏の独占価格論

つぎに、独占価格を「市場価格の特殊な形態」（『価値の理論』一四〇ページ）として把握する白杉氏の立場についていえば、氏は他方で、独占的剰余価値というものを考え出しているのであるが、これは、氏のいう限界原理できまる価値と独占的企業の個別的価値との差である特別剰余価値（前出の『独占理論の研究』四五ページ）の固定化したものである。そしてこのような独占的剰余価値が実現されたものが、氏の理論では独占利潤となるものと、考えてよからう。そうなると、独占企業の生産物の個別的価値プラス独占的剰余価値イコール独占商品価値すなわち（この場合にはすなわちでよからう）独占価格ということになる。そしてこの独占価格は市場価格の特殊な形態ということになる。実は白杉氏は、独占価格を市場価格の特殊な形態として把握する論拠を十分に説明してはいないが、わたくしが氏の学説全体からおしはかると、右のようになるのではないかということである。

一般的にいつて独占価格というものを論ずる場合に、それを市場価格の一形態として把握する立場は、白杉氏以外にもありうる。しかしながら、その場合の市場価格というカテゴリーが、どういうものとして理解されているかということが問題である。つまり、それを短期の、あるいは経過的な、すなわちその時々の子場の需要供給関係によってきまる価格として理解するならば、それは本来そのように不断に変動する価格の基準になっている市場調整価格あるいは生産価格、さらには市場価値とは、当然カテゴリー的にちがったものである。すなわち、独占価格というものを、生産価格ないし市場価値から、さらにいえば、そもそもの価値から、背離したものと把握する立場としての、独占価格Ⅱ市場価格一形態論がある。わたくしは、このような把握には賛成できない。

しかし、白杉氏の独占価格Ⅱ市場価格特殊形態論は、このような立場で主張されているのではないようである。右に紹介したように、氏の主張は、あやまりをふくむとはいえず、価値論を形式的な建前論としているだけで実質的にはそれと遊離してしまっている理論と比べるならば、独占価格と価値論とを結びつけようとする意図の裏づけの上に構成されている点で、健全であり、評価しななければならないと思う。

五 白杉氏の独占利潤論の貴重な観点

さてここにいたって、わたくしは白杉庄一郎氏の独占理論の中でわたくしにとって最も魅力的な主張に言及しなければならぬ。それは、流通主義的な独占利潤説を批判して生産過程からの独占利潤説を主張する白杉氏の観点である。これは内外の他の多くの経済学者の俗流的現象論的独占理論の中で、白杉氏の主張がとくにきわだって輝やく特徴的な点である。といってわたくしは、白杉氏の独占利潤論が完全に正しいとは毛頭いつているのではない。わたくしがいうのは、氏の流通主義批判の観点であり、したがってそこから出てくる氏の一貫した、価値論と独占利潤論とを論理的に厳密に結びつけようとする努力であり、また、独占利潤を不等価交換から求める説に対する白杉氏の批判である。価値論の事実上の崩壊を前にして、それを擁護発展貫徹させようとする氏の立場である。

白杉氏のこのような思想は、その全理論体系の中に実現されているのであって、片言隻語を引用してみてもはじまらないのではあるが、読者の便宜のため、若干の文章を引用してみたい。

「……独占資本主義の基本法則が剰余価値の法則の具体化であり発展でなければならないとするならば、問題はさしあた

り生産過程にあるのでなければならぬ……。そして、このことをはっきりさせておくのでなければ、独占資本主義についての現実認識は誤りにおちいる危険がある。すなわち、独占利潤の基本的な源泉が生産過程にあることが明確にされていないと、独占資本主義の流通主義的ならびに帝国主義的な寄生と頽廢だけが一面的に強調されて、その反面においてそれがその傾向にもかかわらず生産力を進歩させることにより社会主義を準備しつつある側面が軽視されることになりがちであることは、多くの独占理論のしめしている通りである。（『独占理論の研究』二ページ）。またいう。

「……労働者との関係において、独占的超過利潤の源泉をもっぱら労働者と資本家との不等価交換（別の個処で白杉氏は小商品生産者と独占資本家との不等価交換についても同じようにいっている——引用者）に求めるというのは、事実には合致しないであろう。それでは、独占的超過利潤は、労働者との関係においても、生産過程からではなくて、流通過程から出てくるということになってしまう。現実には、そういう部分もある。しかし、それは本来的な部分ではない。独占利潤を剰余価値の法則から把握するというためには、剰余価値そのものの場合におけると同じく、労働力が価値どおりに販売されても、労働者はやはり独占資本家のためには特別の剰余価値を生産することができるし、また生産しなければならぬということ、論証する必要があるであろう。（『独占理論の研究』四二ページ）。さらに、

「おもうに、独占資本が剰余価値の分配にあたって弱小資本より有利な地位にたち、その関係で超過利潤を取得するということは、ありうることである。しかし弱小資本との関係において独占資本の取得する超過利潤を、すべて、剰余価値の分配がえに帰着させてしまうのは、流通主義的偏向といわなければならないであろう。この偏向をさけるためには、我々はどうしても、独占資本が弱小資本にたいして通常もっている生産技術上の優位ということを認めてかからなければならぬであろう。（『独占理論の研究』四四ページ）。

価値論を一貫させて現代資本主義を理論的に説明しようとする白杉氏の態度が健全なものと考えられるのは、もし価値論をもとにせず、不等価交換によって独占利潤を説明しようとするならば、それは、そのような独占利潤を追求することを目的としている現代独占資本主義は、当然、長続きのする、経済論理にかなったような、経済的基盤の上に成りたつてはいないということを意味するからである。いいかえると、現代資本主義は、いまに

も崩壊してしまふような危機にあるということになる。なぜなら、不等価交換によつては、労働力の価値も、独占以外の資本家や小商品生産者の経営も、長期にわたつて維持されえないからである。たしかに例えば労働力の価値とおりの売買ということは、理念的平均としての『資本論』の世界、あるいはいうならば経済原論の世界のことであるが、しかしそれは同時に、長期的平均としての現実の世界であつて、もしそうでなければ『資本論』は観念論的幻想以外の何物でもないことになってしまう。さきの問題にかえると、わたくしは、たしかに現代資本主義を危機的段階としてとらえる立場のあることを知っている。しかしこの問題は、ここでの原理的な問題からだいで先に延長された問題であつて、それを論ずるには多くの中間項と具体的事実が必要なので、ここではこれ以上論じないでおく。

六 その他の諸問題

さきに列挙した白杉氏の考えの中の興味のある問題点のうち、あとに残つたいくつかの点について若干言及して、白杉説に関する議論をうちきりたいと思う。独占資本主義が生産力を発展させる進歩的な側面をもつてゐるとする白杉氏の主張については、簡単に肯定ないし否定はできない。独占段階においても、新しい技術を追求する原動力は、特別剰余価値を求める志向であつて、それは独占ではない、独占とは正反対のものである。白杉氏には、カテゴリーの混乱がある。しかし他方で、現代資本主義においては、巨大企業がその資本力にものをいわせて、新技術の開発をめざして活動し、それが大きな成果をあげていることは、まぎれもない事実である。カテゴリーの混乱はあつたにせよ、白杉氏がこのような現実に、とらわれない目で着目したことは、評価されてし

かるべきことと思う。問題はこのような現実を、理論的にどう解明するかであって、それはもう白杉氏だけにかかわることではなく、一般的に独占価格論・独占利潤論の中でとり扱われるべき問題である。

つぎに、価値・価格を論ずる場合に、長期のそれと短期のそれとを区別して考えるという白杉氏の観点*であるが、実はこの観点はマルクスにおいて、必ずしも明確に意識されていたとは思われず、したがってまた多くのマルクス・エピゴーネン(追隨者)にも欠けているのに、白杉氏がこの観点をその体系の中にうちだしていることは、高く評価されるべきだと思う。ところで、わたくしじしんとして、このように長期と短期の区別を導入して、市場価値ないし社会的必要労働時間の問題をどう分析したらよいかという問題は、ここでは省略するが、やはり長・短の間の中期の価値・価格という観点をいれた方がよいと思う。

* 一般的に価値・価格について短期においては限界原理が支配し、長期においては平均原理が支配するという白杉氏の見解は、例えば『独占理論と地代法則』の中に遺稿としておさめられた立命館大学教授就任講演「平均原理と限界原理」の草稿最後の部分が参考になる(同書二一六ページ)。

なお、資本主義の独占段階において平均利潤率がどうなるのかという問題に対する白杉氏の見解についてであるが、氏はこの段階で二つの平均利潤率が存在するという。『独占理論の研究』一一三ページの注で次のように述べている。「独占段階においても競争する資本は競争するかぎりにおいて平等主義者としてふるまう。ということは、この段階においても、競争のあるかぎり、平均利潤法則の作用が残るということを意味する。そして、このことの現実面での現われが、ほかならぬ独占資本相互間と非独占資本相互間におけるそれぞれの利潤率均等化傾向の事実であると考えられるべきである。」このような独占段階における二つの平均利潤率の存在を主張

するのはなにも白杉氏ひとりでなく、他にも多くの人々がいるが、白杉氏の独特なところは、単に利潤率にとどまらず、剰余価値率について「独占体間および非独占体間に、それぞれ異なった率ではあるが、とにかく剰余価値率の均等化する傾向がみられる」(『独占理論の研究』一〇六ページ)と主張していること、さらに、「独占体間の平均利潤率と、非独占体間の平均利潤率とは、隔絶しながら、しかもなお接近しようとする傾向の全然ないものだとはいえず……」(同書一一〇ページ)と考えていることである。この最後の指摘は、ひじょうに興味深い。

第二章 ルダコワ女史の独占理論について

モスクワ大学のルダコワ女史が、『資本家的独占——その経済学的本性と経済的実現の諸形態*』(モスクワ、一九七六年)という著述で展開した独占理論は、原文がロシア語で、日本語に翻訳されておらず、またわたくしの知るかぎり、わが国で、たとえ一言でも、紹介されたことはないが、これはきわめて残念なことといわなければならないほど、この書物は注目すべき内容を含んでいる。それで、この書物の内容を紹介しながら、わたくしの考えを述べていくことにしたい。

* И. Е. РУДАКОВА. КАПИТАЛИСТИЧЕСКАЯ МОНОПОЛИЯ: ЕЕ ПОЛИТИКО-ЭКОНОМИЧЕСКАЯ ПРИРОДА И ФОРМЫ ЭКОНОМИЧЕСКОЙ РЕАЛИЗАЦИИ. МОСКВА, 1976.

一 独占分析の方法論上の根本問題

この書物のまず第一の特徴は、独占分析の方法論的基礎を、きわめて厳密に扱おうとしていることである。こ

の書物の序論(「独占および独占利潤を分析するための若干の方法論上の問題」と題されている)でルダコワ女史が述べている考えの中の注目すべき点は、独占と非独占の同時存在ということと、等価交換を前提しなければならないとしていっていることである。

A 独占と非独占の同時存在という前提

独占資本というものは、全体としての資本主義経済の中に存在するものであって、そのような経済には独占資本と非独占の諸要素とがあることは事柄の性質上いうまでもないことのように思われるが、ルダコワはそれを自明の常識としてやりすごさずに、意識的、理論的に、厳密に明確化しようとしている。そして独占と非独占のからみあいには、いわば空間的にそれぞれが存在しているということもあるが、もっと複雑で注意しなければならぬのは、独占と競争の相互浸透だと、ルダコワはいう。

B 等価交換を前提にして独占利潤を分析する必要性

ルダコワのこの主張は、おそらくAの論点よりも、もっと問題の核心に迫るような命題である。ルダコワは次のようにいう。マルクスの経済学体系の最重要の方法論上の前提は、諸商品の価格はその価値に等しいとする仮定である。この理論的前提は、マルクスの全学説を貫いて、各カテゴリーの研究、それぞれの分析の各段階におかれているものである。この前提にもとづいたからこそ、マルクスは、偶然的・非本質的差違を捨象することができたのである。マルクスじしんのことばによれば、「このような一般的な研究においては、常にそもそも、現実の諸関係がその概念に一致するということが、あるいは同じことだが、現実の諸関係は、その本来の一般的な型を表現するかぎりにおいてのみ、叙述されるのだということが、前提される*」のである。そしてこの価値・価格

一致の前提を厳密に守ったからこそ、マルクスは、資本主義経済の諸法則の発生を解明できたのである。また、この前提をおいたからこそ、価値・価格の一致という殻かの中での中味の変化、つまり経済関係の転化を明らかにすることができたのである。この経済関係の転化というのは、商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転化、また価値法則が生産価格法則の形をとるようになること、である。このような本質的諸関係の変形（モディフィケーション）は、外的な一致の内部で、すなわち等価交換の枠内で生じたのであった。

* K. Marx. *Das Kapital*, B. 3, S. 167. (Dietz Verlag Berlin, 1956).

ルダコワは、資本主義が独占段階に入っても、労働価値論が通用するかぎり、価格と価値の一致（この場合、価格と、その価値的基礎つまり生産価格との一致）の前提は不可避であるという。価値の転化形態（生産価格などのこと）がその当初形態からどんなにへだたってしまったとしても、このような価値の変形形態が価格の客観的な基礎であるかぎり、このような変形形態をとっているその基礎の運動の諸法則の解明こそが問題なのであり、価格のその時々の変動は消去しておかなければならないのであって、価格はその基礎と一致するものとみなしておかなければならないのである。価格の基礎がきちんと解明されれば、そこからの背離は、その他のいろいろな要因の作用から説明できるようになるだろう。もしこのような手続きをふまえないければ、帝国主義の諸関係を、諸関係の資本主義的体系の産物として、厳密に、矛盾なく解明することはできないだろう。

ルダコワは続ける。具体的にいうと、独占および独占利潤の問題に関して、右の価値・価格一致の前提はとくに重大な意味をもってくる。ここで大きくいえば問題はつぎのように提起される。いったい、独占資本の生産物の価値の枠の中に、独占が商品交換のいわば「正当な権利」によって取得できるような部分（これは独占形態にお

ける資本の特別な機能の実現である）が存在するのだろうか、それとも、独占の機能とは、独占の枠外でつくられた価値の単なる略取にすぎないのだろうか。ルダコワは答える。独占は、自己の枠内で、その所得の実体のうちの一定部分をつくりだす、そしてそれ以外に、自己の枠外でつくられた価値の一部分を略取し、それを自己に有利に再分配する可能性をもっている。この独占の二つの実現形態のうち、第一のものが第一義的・規定的なものであって、第二のものは、生産部面における独占資本の地位によってできるもので、したがってこれは第二義的、副次的なものともみなすべきである。だから、第一形態が研究される、分析のはじめの段階では、価値諸形態の客観的な基礎の変化と関係のない問題は、すべて分析から除かれるべきである（もちろん、ここでの研究は、資本主義の爛熟した段階における価値関係の進化や変形の解明なのであって、独占の問題を資本主義以前の価値法則におしこめてしまうことではない）。さらに分析を進めれば、等価交換原理の侵害が出てくるかもしれないが、しかしそもそも独占資本主義の諸カテゴリーは右の前提の上で説明されるべきであって、さもないと労働価値論は独占段階では通用しないことになってしまう、とルダコワはいう。

二 資本家的独占の経済学的本質

さて、ルダコワ女史は、その著述の第二章で、資本家的独占の経済学的本質について述べていくが、それはまず、生産諸条件の独占的所有についての命題から説明を始めて、資本家的独占の本質を明らかにし、つぎに、そこに含まれている矛盾を暴露し、最後に、この問題についての西欧の研究の批判的分析を行なっている。このうち資本家的独占の本質についてのかの女の理論的分析をみていこう。

ルダコワは、まず、現象から始めて本質へと下向しようとする。現象は市場、流通領域であり、本質は生産面である。ルダコワはいう。独占の特質が現われるのは、市場である。つまり独占は、市場の需要量を考慮して、供給量を調節することによって、価格に決定的影響を与える。これが、独占の本質の第一の明瞭な発現である。また、独占が経済的に実現される形態である独占利潤も、市場で最終的な姿をとる（ここでいう経済的实现ということは、独占ということが実体的な、経済上の結果＝果実に実を結ぶということ、このような結果がなければ、独占ということも、なんら経済学上の意味をもたなくなる）。だから、市場関係は、独占の本質の現象する領域であるだけではなく、その発展、完成でもある。しかし独占の基礎は生産にある。

A 生産諸条件の独占的所有

ルダコワはこういって、生産面における独占の特徴の分析に入っていく。資本主義的所有一般と独占的所有の相違は、まずは量的な違いとして現われるが、やがてそれは質的な違いに変わっていく。独占には高度の生産力が照応するのである。この量的差違を具体的にいうと、膨大な量の生産手段の少数者の手中への集中、それまでの規模を大きく超過するほど多量の商品の生産と販路に対する支配などである。初期の資本家的独占の技術的基盤は、量の膨大さとはともかく、資本主義一般の巨大生産の基盤と、本質的には変わらない。ここから、初期独占の不安定性が説明できる。けれども、生産力の発展と独占の形態の発達につれて、量的変化が質的变化に変わる。この転化の本質は、独占資本の発達した形態には、生産力とその組織の質的により高い水準——単なる資本家的巨大生産から独占を区別するより高い水準——が照応するということである。

独占資本は、高度に社会化され、計画的に組織された労働の新しい生産力を、自己の排他的利用の対象とする。

独占資本は、社会的分業に編成され、計画的に結合された、高度な組織と社会的効率をもった労働を、搾取する。独占資本は、これらの新しい生産力と社会的連関に寄生しているが、それが、独占資本の特質、その排他的優越性としてあらわれるのである。そしてこの特質と優越性の実現が、独占の特殊な所得の形態つまり独占高利潤の形態をとるのである。なお、経済力の独占への集積は、技術進歩の上からの必然性からばかりではなく、独占の地位の維持強化のためでもあることを、ルダコワは指摘している。

B 資本家的独占の本質

生産諸条件の独占的所有について以上のように述べた後、ルダコワは、資本家的独占とはなにか、その本質を説明しようとする。

ルダコワによると、独占資本の量的特質は、巨大な資本量、巨大な生産量、そして高利潤にあり、また、独占資本の質的特質は、資本の独占的形態が資本の自己増殖のために行なう機能にある。資本の独占的形態の機能は、(一) 先進的生産力と社会的労働の計画的組織の利用、(二) 参入障壁、にあり、こうして、独占資本は市場の自然発生性よりも、独占の生産調整に依存する。そのために独占には高い利潤率が保障されるのである。

こうしてルダコワは、独占についての定義を与える。独占とは、特別な自己増殖条件におかれた資本である、と。ルダコワはいう。「巨大会社」、あるいは「大会社の協定」というような定義の場合には、独占は具体的な経済的研究の対象となっているのであるが、理論経済学のカテゴリーとしては、独占は、資本の特殊な形態、関係である。そして、資本の形態として規定された独占こそ、経済学のカテゴリーの体系の中で、その「構成材料」となることができるのだ、と。さらに若干くわしく、ルダコワは独占の定義について説明する。マルクス・レー

ニン主義理論においては、「独占」というカテゴリーは、自由競争と、それにかかわってその実現のために必要なすべての方法（資本の自由移動、生産力諸要素の利用への諸資本の自由な参加、自由な価格変動）を、それとは別のそれと対立する諸原理（個別資本が生産量をきめ、市場の規模を調整し、新資本の自由な参入を妨げ、社会総労働の比率に決定的影響を与える可能性）でおきかえるような、資本の形態のことである、と。

三 ルダコワ女史の独占利潤・独占価格論の検討

(一) 以上ほとんどそのままの女の理論を紹介してきたのだが、ルダコワ女史の独占分析は、その方法論において、卓越していることを、認めなければならないと思う。等価交換を分析の前提としなければならないとする一貫した立場、独占利潤の第一義的基礎を生産領域に求め、これを生産諸条件の独占的所有のなかにまず把握して、そこから独占の理論的本質の解明を行なっていく手続き、ソビエト経済学界の、彼女からみれば浅薄・通俗的な独占価格による所得再分配を中心とする独占理論に対する鋭い批判（この点の紹介は紙数のつごうで本稿では省略した）などは、誰しもがその分析と論理の厳しき、一貫性に驚歎するであろう。しかしながら他方で、独占利潤・独占価格の形成の具体的なメカニズムの分析については、まだつつこみが足りないところがある。

(二) ルダコワ女史の理論展開の中で、惜しまれる処は、彼女が、そもそもその価値、市場価値というカテゴリー一般（あるいはその自由競争段階における中味といってもいい）について、再吟味することなく、つまりこれから独占価格、独占利潤を研究するために、これらのカテゴリーをさらに深めておくということをせずに、いわば既成の通説に無反省にのっかって、そこを素通りして独占段階の価値、価格の分析に進んでいることである。ただし

これは彼女に限らず、ソビエトの経済学界にかなり共通の弱点であろう。

(三) さてルダコワの独占利潤分析を検討してみよう。ルダコワの場合にも、独占利潤が生まれるメカニズムは、大きく分けて二つある。その一つは、彼女のいう価値的基礎をもった独占利潤であり、もう一つは、独占価格を通じての所得再分配によって独占資本の手に入る独占利潤である。そして、ルダコワの理論体系はこのうちの前者に分析の主力を注いでいるので、われわれもこの問題をとりあげなければならない。彼女の分析は、各産業部門内の問題と部門間の問題にかかわっているもので、まず産業部門の内部で独占利潤がどのように生まれるのかという点についての、彼女の分析からみていこう。

それぞれの生産部門でなぜ独占利潤が生まれるかという点、それは独占資本の生産性とその部門の平均水準よりも高いからだとルダコワはいう。これはその部門生産価格と独占資本の生産価格との差、あるいは生産価格から平均利潤をさし引いた費用価格の問題として、部門平均費用価格と独占費用価格との差としてあらわれる。この差が独占利潤である。そしてこの部門平均労働支出と独占の個別労働支出との量的差違は安定的なものであり、この差違は、生産諸条件の独占的所有にもとづいて、きわめて独占的な方法で、つまるところ社会の生産の発展を制限するという手段によって、固定化され、再生産される。こうして超過利潤が特殊独占超過利潤に転化し、独占的形態における資本の機能の結果としてあらわれる、とルダコワはいうのである。

ところがこの部門生産価格はどうにしてきまり、その水準はどうなっているのか。ルダコワの説では、なんと、この部門生産価格というのは、その部門の独占資本が生産した商品の圧力のもとに形成され(というはその部門の商品の大量は独占資本の手で生産されているのだから)、独占商品の個別労働支出量に引きつけられて、そ

れに近く形成されるのである（ルダコワのこの論理は正しい）。いわゆる指導価格（プライス・リーダーのもとで形成される価格）は、プライス・リーダーの主観的な政策の結果とみなすべきではなく、右のような市場のメカニズムの中で認められる社会的市場価格なのである。さてそうになると、このような部門生産価格は独占資本の個別生産価格に量的に近いのだから、この二つの価格の差つまり独占利潤は、当然のことに、あまり大きなものであることはできない。論理的にそうなる。

まとめてくり返すと、ルダコワ説では、部門生産価格（いうまでもなくいわゆる価値的基礎をもった価格、あるいは価値から背離していない価格といってもよい）は、独占資本の商品の価値価格の近くにきまる、それは、独占商品が部門の大量を占め、さらには、独占資本が生産における支配力にものをいわせて需給調整をし、価格と生産量の最適組みあわせをはかり、さらにはその部門への参入の阻止もはかって、右の部門生産価格で売れるようになるからである。そうするとこの部門生産価格と独占生産価格との差があまり大きくなることは期待できない。

それでは、価格操作による所得再分配による独占利潤ではないところの、ルダコワが第一義的意義を認める価値的基礎をもった独占利潤というのは、あまり大きなものとはなりえないと結論すべきだろうか。私はこの点では、ルダコワじしんはあまり明確に認識し、洞察、強調してはいないと思われる次の点を、重視しなければならぬと思う。それは、独占利潤の中心部分は、部門生産価格と独占生産価格との差から生まれるというよりも、むしろ、独占資本の計画的設定による価値価格と実際に支出された価値（労働支出量）との差によって生まれると考えた方がよいだろうということである。例えば、ルダコワは、独占の影響下で定められる部門生産価格は、現存生産能力を正常に稼働させて生産した場合よりも高くなるという。それは、独占が部門生産価格をきめてい

く場合の、独占の生産条件の選択というのは、独占傘下の非効率工場の比重の増加と、現存資源の不完全利用という特徴をもっているからだという。つまり独占は遅れた設備をもった工場の方をたくさん動かしたり、計画的に設備を遊ばせておいたりするといふのである。したがって、独占資本は、需要がふえた場合には、効率的工場を完全操業して生産をふやすから、この場合とくに利潤がふえるといふ。ルダコワならずとも、一般に七―八割の稼働率でもりっぱに利潤をあげられるようにしくまれた独占価格といふものがあれば、そこでの独占利潤といふのは、より多くの稼働率で生産された場合の価格と右のような計画価格との差として出てくる部分が多いといふことは、わかりやすい道理ではあるまいか。いいかえると、独占資本の計画的価格設定によって価値およびその部門の市場価値がきまるとすれば、それよりもすくない独占資本の**实际的個別価値**との差が、**独占利潤の価値**の源泉となるだろう。

さてそうなると、このような場合に生ずる根本的な疑問は、それでは**価値**とはそもそも何なのかという問題である。ルダコワによれば、独占の計画的設定価格が独占の**個別的価値**であり、それが市場価値を支配する。これが**価値**である。しかもこれは、独占が調整した需要とも照応した需給関係の上に成立するわけである。ところでルダコワがこれを**価値**といふ場合、ルダコワはこれを**労働支出**(計画的労働支出?)、つまり商品に物体化された社会的必要労働時間という風に認識しているわけであり、したがってまた、ここで問題になる**独占利潤**を、**価値**の基礎をもった**利潤**と考え、**価値的基礎**をもたない**所得再配分の結果**としての**独占利潤**と区別していることは、すでにくり返し指摘したところである。それでは、この計画的労働支出は、はたして**価値**といえるだろうか。ルダコワはそれを市場に出される前に、独占の計画の中であらかじめ**社会的承認**を通過しているところの、半分

だけの価値だという。このところは、意見のわかれる、問題のあるところだろう。独占の需給調整計画の中で生産されていけば、そしてそのような独占商品が市場の大量を占めて市場価値を支配すれば、そのような独占商品の個別的価値が、社会的価値（価値とは本来そもそも社会的価値である）の資格をもちうるのだろうか。しかもその市場価値を支えている需給関係は、独占の利益にしたがって形成されている要素が大きいのである。これはいわば虚構の上にたった歪曲された価値というべきであろう。そして当然、価値という以上、社会総労働の諸部門への配分という価値法則の基本的機能が、右のような独占資本の恣意的操作の影響をまぬがれていない価値によって、正常にはたされうるだろうか、の問題が生ずる。

(四) つぎに部門間関係についてのルダコワの分析を検討してみよう。ルダコワによると

(1) 高度に独占化された経済においても、資本の部門間移動が存在する以上、平均利潤率形成の傾向は存在するし、そうするとまた、ある種の社会的生産価格の形成の傾向も存在することになる。

(2) このような利潤率の平均水準への傾向とならんで、個々の独占資本の利潤率および高度独占化部門の部門利潤率の安定的上方背離が存在する。

(3) 独占段階において部門間次元で形成される社会的生産価格も、特殊な性格をもつので、これを自由競争時代の生産価格と区別して、いまかりに管理生産価格とも名づけることができる。

ルダコワが右のようにとりあえず管理生産価格と名づけたものについて、考察してみよう。ルダコワの管理生産価格は、その水準そのものが独占による調整のもとで形成されていることと、個別独占および独占化部門の独占超過利潤は資本家階級の利潤共通フォンドに入らず、独占の手に留保されているという、二つの特色をもって

いる。なおいうまでもなく、ここでいう管理生産価格というのは価値価格の次元での問題である。

ルダコワの管理生産価格説は、多くの論者の主張する二セクター論、つまり経済を独占・非独占の二つのセクターに分け、それぞれにそれぞれの利潤率が存在するとする説よりも、現実を總体的に、かつ柔軟にとらえて、るといってよいだろう。

しかしルダコワのような説をたてると、とうぜん次のような疑問が生ずる。それは、社会の生産の相当部分を占める独占の利潤がふくまれない、平均利潤(これはもともと社会全体の資本家の全利潤をもとにしたカテゴリーである)ということがいえるだろうか、という問題である。しかしこの問題は、結局のところ、平均利潤率ないし生産価格とは、そもそもなにかという問題にかといる問題につきあたる。そして、平均利潤ないし生産価格とは、資本家たちに平等な利潤を保障する機構というだけでなく、社会的物質代謝を進める上での投資分配のメカニズム——その意味での社会総労働の配分の役割をはたしている価値、いわば社会的再生産論上の価値——としてとらえるべきではなからうか。管理生産価格は、この意味では歪曲された投資分配、再生産論的価値であろう。そもそも、こういう意味での、つまり一般的にいうと、再生産論の意味での、平均利潤、生産価格が存在しなければ、およそ資本主義経済の再生産過程は保障されないだろう。もともと、平均利潤率の法則というのは、二つの側面をもっている。それは、一人一人の資本家の利潤のために、生産、投資が編制されるという側面(要するに各個の資本家の利潤のために、部門間労働配分、投資配分が行なわれるのである)と、社会全体の欲望、需要、必要にしたがつて、いにかえると社会全体の再生産の必要にしたがつて、生産、投資が編成されるという側面である。管理生産価格というのは、平均利潤・生産価格がもともと持っていたこの二つの側面のうちの、とくに前者、つまり資本

家の利益にしたがって、生産・投資が行なわれるという側面がさらに拡張され、しかもそれが総資本家ではなく、その中の独占資本家の利益のためのみ拡張されたものと、考えることができるだろう。

管理生産価格について、ただちに起こるもうひとつの疑問、つまりこのように歪曲され、つりあげられた生産価格の商品を、なぜ、社会の需要がうけられるのか、という問題がある。しかしこの問題については、ルダコワジシんがそれに答えている。その点を引用しておこう。

「社会的需要が有効需要（支払能力ある需要）という形でのみあらわれるかぎり、独占は社会的需要の水準そのものに影響を与える。社会的生産と社会的欲望の比率の外的表現としての需要供給の均衡は、いまや、社会的欲望は完全には満たされず、社会的生産能力が完全には使われない水準において、うちたてられる。こうした条件のもとでは、つりあげられた労働支出量が社会的なものとなり、そういうものとして社会によって支払われる。独占の調整は結局生産と需要の不均衡をつよめ、破壊された均衡の「自然的」回復メカニズムである恐慌によっても、均衡をとりもどすことができなくなる。ここから資本主義的再生産過程への国家の介入の客観的必然性（必要性）が生まれるのである。」

ルダコワ女史はこのように述べているが、われわれはまた、この文章の中に独占資本主義の中から国家独占資本主義が生まれる必然性を説明するための一つのヒントを発見することができる。